

2013年

説明会・入室テスト

中学生、高校生ともに、春期講習、4月からの通常授業を希望される皆さま対象の説明会です。
通常授業を希望される場合、入室テストを受験してください。

説明会：予約不要 入室テスト：無料・要予約 (TEL03-5371-5487)

説明会 (生・保・中高3生)	2/11(祝・月) 渋谷本館 10:00~	2/17(日) 新宿本館 10:00~	2/24(日) 新宿本館 10:00~	3/16(土) 新宿本館 10:00~	3/17(日) 渋谷本館 10:00~
入室テスト (中高2~3生)	2/11(祝・月) 渋谷本館 11:30~	2/17(日) 新宿本館 11:30~	2/24(日) 新宿本館 11:30~	3/16(土) 新宿本館 11:30~	3/17(日) 渋谷本館 11:30~

※新中1生の通常授業への入室にはスタートダッシュ講座をご受講ください。(スタートダッシュ講座開講期間は、新中1生対象の入室テストは行いません。)

2012年 大学受験合格実績 第6期 在籍346名

東大各料類69名

理科Ⅰ類 17名
理科Ⅱ類 12名
理科Ⅲ類 1名
文科Ⅰ類 14名
文科Ⅱ類 14名
文科Ⅲ類 11名

東京大
69名

ハーバード大 1名
国公立慶医
42名

医学部医学科118名

東京医科歯科大(医) 6名
京都大(医) 1名
東北大(医) 1名
千葉大(医) 3名
筑波大(医) 1名
横浜市立大(医) 1名
金沢大(医) 2名他
※国公立大医計38名
慶應大(医) 4名
東京慈恵医大(医) 12名
順天堂大(医) 13名
日本医大(医) 12名
昭和医大(医) 11名他
※私立大医計80名

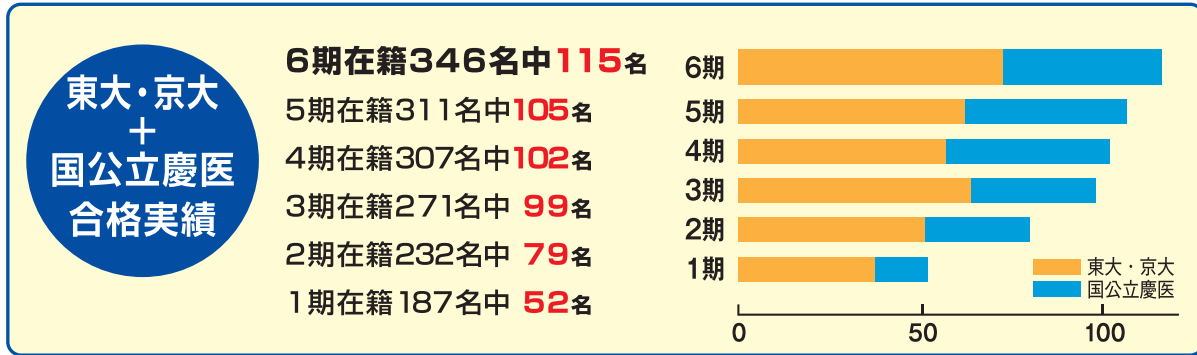
国公立大165名

京都大 4名
一橋大 18名
東工大 10名
東外大 7名他

慶應大
157名

早稲田大
154名

上智大
45名



GnoTube

Gnobleを動画で体験！

どんな先生がいるんだろう？
どんな授業をするんだろう？
グノーブルは何が違うんだろう？

www.gnoble.com/gt/

新宿本館

アクセス：JR新宿 サザンテラス口 徒歩1分
〒151-0053 JR代々木 北口 徒歩5分
渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F 京王新線、都営新宿線、都営大江戸線 出口2 徒歩0分

渋谷本館

アクセス：JR渋谷 宮益坂口 徒歩5分
〒150-0002 東京メトロ渋谷 11番出口 徒歩4分
渋谷区渋谷1-7-6 青山CRビル1F 「渋谷ヒカリエ」青山通り方面出口 徒歩1分

お茶の水本館

アクセス：JR御茶ノ水 御茶ノ水橋口 徒歩2分
〒101-0062 東京メトロ御茶ノ水 徒歩3分
千代田区神田駿河台2-5-5 東京メトロ新御茶ノ水 B1出口 徒歩4分
村田ビルディング3F (1Fスターバックスコーヒー)

大学受験グノーブル事務局【新宿本館・受付】

お問い合わせ 月曜～金曜15:30～21:00/土曜14:00～21:00/日曜休館(説明会・テスト日除く)
〒151-0053 渋谷区代々木2-8-3 新宿GSビル1F

TEL 03-5371-5487 FAX 03-5371-5488

一知の力を活かせる人にー

大学受験
グノーブル

グノーブルにアクセス。東大にアクセス。
www.gnoble.co.jp
新宿・渋谷・お茶の水

GIO10-1

もっといい明日が見えてくるーLetters from Gnoble

vol.10
2013年2月発行
中学生・高校生・保護者の方へ

Gnoble
G-let
グノレット

All men by nature
desire knowledge.

アリストテレス
(Aristotles、紀元前384年ー紀元前322年)
「万学の祖」と言われる古代ギリシャの哲学者。

Gnoble Principles Vol.1
ー「知の力」とはー

グノーブル代表：中山 伸幸(英語担当)

Special Interview
“神業”とも言われる、東大理Ⅱから医学部医学科への進学。
グノ5期生・江頭柊平さんが、その経験を語ってくれました。
東大理科Ⅱ類2年(芸芸大附属出身) 江頭 柊平さん

世界に羽ばたくグノ生たち
進学・留学レポート Vol.1

(ハーバード大学1年/筑駒出身) 風早 智孔さん
(ペンシルベニア大学留学中/栄東出身) 石倉 愛莉さん

卒業生編著 グノーブル用語辞典

Gnoble
大学受験 グノーブル

Gnobleは、私たちの理念をこめた造語です。
Gnoは「知」、-bleは「力」をあらわします。
Gnoは、knowを意味するギリシア語、-bleは、ableに由来します。
oは「知識のつながり」、「人とのつながり」も意味しています。

Gnoble Principles Vol.1

—「知の力」とは—

グノーブル代表：中山 伸幸 (英語担当)

「子供たちは社会の宝であり、その子供たちを教え育むことにまっすぐに取り組みたい。」

2006年夏、新しい塾を立ち上げる準備をしていた頃、このように私たちは思っていました。教育の一翼を担う限り、生徒たちが「生きる力」、「未来を切り拓く力」を身につけていく手伝いに真摯に取り組むべきだとも考えていました。

そこで、塾名には「知の力」を表すグノーブルという言葉を作り、「知の力を活かせる人に」というフレーズを脇に添えました。

私たちの考える「知の力」とは何かを紹介させていただきます。

グノーブル発足時からの思い

一人ひとりの生徒と向き合い、彼らの将来の幸せにつながる指導を念頭に置く塾でありたいと、私たちはグノーブルの発足当時から考えていました。それは、規模を優先しすぎて質の伴っていない塾、難関大学への合格者数にとらわれすぎている塾に対するアンチテーゼという側面もありました。子供たちにはそれぞれの人生があり、その人生をととても大事に思っていられっしやる保護者の方々がいます。それを、授業料を運ぶ一人、合格実績を稼ぐ一人、という単位で見えていくのは間違っているという思いがあったのです。どの社会、どの時代においても、子供たちは「社会の宝」、「私たちの未来」です。私たちは生徒たちとまっすぐに向き合って、彼らの将来の幸せにつながる指導ができる塾でありたいと考えてきました。

幸せを実現するには、生徒たちが「力」を備えていくことが鍵になると思います。アスリートでも、アーティストや職人でも、それぞれに必要な力を備えることが素晴らしい仕事につながります。グノーブルにお通いいただいている生徒たちは高等教育を受けて、それを土台に社会に貢献していくことを選ぼうとしているのですから必要なのは「知の力」です。それを身につけていくことが、生徒たちの将来の夢の実現につながります。力があればこそ、それを他の人のために使えます。それは他者から必要とされる人になれるということで、そのことは本人の幸せにつながると言えます。

「知の力」を鍛えていくには、中学・高校期はととても大切ですが、このことを社会の枠組みの中で捉えてみましょう。



社会は人の集まりです。人と人が一定のルールのもと、持ちつ持たれつの関係でつながっているのが社会です。赤ちゃんや幼い子供たちは一方的に人の世話になっています。愛らしさでお返しをしているとも言えますが、身近に世話をしてくれる大人がいなければ、幼い者たちはほんの短期間であっても生きていくことができません。

それに対して大人は弱者を守り、社会に貢献する存在です。自分の足で立って自分を律するだけでなく、援助を必要としている人たちを支え、社会が機能し発展していくことに力を尽くすのが大人です。

中学生・高校生は、守られる立場からひとり立ちへの転換を準備する時期です。自分と向き合い、自分はどんな大人になりたいのかを考え、進路を選択し、そこに向かって自分を鍛えていく時期です。

主体性を育む

守られる側からの転換期に大切なのが「主体性」です。自分がどんな大人になりたいのかは自分で決める問題です。明確な将来像はなかなか決められないかもしれませんが、自分の人生の選択は自分にしかできません。自分を鍛えるのは自分以外にはいないということを引き受けていく必要もあります。

自分の将来を考える際、そもそも大学に行くべきなのかというところから考え始める生徒もいるでしょう。とりあえず大学には行っておこう、という程度の意識から始まる人も多くいるでしょう。いずれにせよ、自分と向き合いながら、どの学部か、どの大学かと、ある一定の

方向を選択することになります。「決断」することは文字通り他の可能性を「断つ」ことですから真剣にならざるをえません。自分の責任でものごとを進めていくことは恐いことでもあります。両親に相談をすることはできても、親に決めてもらうことはできません。

この守られる側からひとり立ちに向かう転換は、昆虫の変態になぞえられる難事業だとも言えます。周りの大人は時期が来るのを信頼して待つことが大切です。外から急がせることは難しく、下手に外圧を加えると、トンボや蝶の羽根が歪んでしまうように生徒たちの成長も歪みかねません。ときには、本人がなかなか勉強に向かえなかったり、勉強から逃げたりする時期を迎えることがあります。しかし、転ばぬ先の杖とばかりに大人が先回りをする、短期的には失敗回避になるかもしれませんが、失敗からこそ学べることを学びそこね、結局は本人が力をつけるのを阻んでしまうことになります。

周りの大人が口やかましく言えば言うほど、主体的な精神は芽生えず、逆に殻は硬く閉じてしまうこともあります。周りの口やかましきは、本人がじっくり自分と向き合うときの阻害要因です。

大人たちに大切なのは環境を整えることだと思います。環境の中で、生徒たちはさまざまなものを見聞きし、感じ取り、刺激を受けます。そこにある空気を吸い、水を飲み、栄養をとることが生き物のあり方を決定するように、環境の中で受け取っていくものが生徒の内側を育みます。どのような環境がいいかを考え、その環境を整えていくことは大人の責任ですし、ご家庭や学校に加え、現代においては、私たちのような塾も、大きな役割を担っていると自覚しております。

まなざしを向け、信じる

グノーブルがどのように学習環境を整えているかは、次回、詳しく述べさせていただくつもりですが、「まなざしを向けること」、「信じること」を特に大切にしています。

「まなざしを向ける」というのは、常に一人ひとりの生徒に関心を寄せて見守っていくということです。

「信じる」というのは、どの生徒も潜在的な力を備えていて必ず成長できると信じるということです。

私たちは、生徒一人ひとりの名前をなるべく早く覚えるようにしています。そして、生徒たちとの授業でのやり取り、あるいは授業外の質問やときに雑談、何よりも、毎回の添削を通して、長期的に生徒たちにまなざしを向けていきます。

授業中の問いかけには良い答えが返ってくるとは限りません。生徒が私たちにする質問も始めはレベルが高いものではありません。添削対象の答案に一瞬あきれてしまうことも頻繁です。しかし、「後生畏るべし」の言葉

通り、若い人たちの無限の可能性には畏れを持って接し、その成長を信じるのが大切です。大人はついつい「こんなこともできないのか」と、かつての自分を忘れて生徒の現状にがっかりしてしまいがちです。しかし、できていないところをいちいちあげつらうコメントを残すことが添削ではありません。よくできている点をさりげなく誉め、前向きに今後の課題に取り組めるように促すことを心掛けることが私たちのつとめです。生徒の答案と私たちのコメントの「交換日記」的な関係を長期的に続けながら、その生徒の成長を見つめていくことが大切だと思います。

とはいえ、信じて待つことは、実に難しいことです。今の実力と目標との落差に「この生徒はハードルを越えることができないんじゃないか」と悩むこともあります。生徒たちが先週より今週、今週より来週というように漸次的に成長することはめったになく、長く成長の兆しが見えないことがほとんどです。しかし、辛抱強く待っていると、あるとき、ある高みへと大きな段差を乗り越えた生徒の答案に出会うことがあります。これは本当に劇的な瞬間です。

集団授業の良さを活かした環境作りも大切です。たとえば、一人の生徒の勉強に向かう姿勢が変わってくると、それがそのクラスの他の生徒に広がっていくことがあります。

私たちは授業中によく生徒を指名して答えてもらいますが、当たった生徒の受け答えから周りの生徒たちが「こんなにしっかり復習している人もいる。自分も少しやってみようかな」といったことを感じ取る場合があります。この気持ちの動きは主体的な勉強のきっかけになります。これが環境の力、集団授業の良さのひとつです。

もちろん、すべての生徒が同じように気付いて考えるわけではありません。時が熟している生徒には感じられる、と言ってもいいでしょうか。時が満ちていない生徒に対してはやはり、その生徒の内側の成長を信頼して待つしかないと思います。私たち教える側は、栄養を考えた、なるべく美味しい教材や授業を提供する努力をしつつ、そして心を開いて時が来るのを待ちたいと思います。

実際には、教材や授業の仕組みなどには、生徒たちへの触発を考えたさまざまな工夫を凝らしていますが、その点については次回、具体的に述べさせていただきます。

未来を切り拓く受験勉強

「受験勉強＝必要悪」という考え方が根強く残っているように思います。「受験勉強は難関大学合格のために仕方なく頑張るべきもので、その内容は将来に役立つこと





はあまりない」との考え方です。もし教える側が、これを前提とし、効率よく得点することを優先し、テクニックで入試を突破すれば勝ちだという発想で指導していると、生徒を単なる受験マシーンにしてしまいます。入試を突破したものの本当の学力は身につけていない、ということにもつながりかねません。「一流大学に合格できましたが、英語は大してできません」という勉強の仕方は、学歴万能だった古い時代には通用したでしょう。しかし今は、真の実力を備えていることが問われる時代です。各難関大学も教育環境の整備や国際競争力の保持に真剣に取り組んでいます。入試問題にも、「こんな生徒に来ていただきたい」という大学側のメッセージが反映されている場合が多く見られ、つまり、受験生はそれに応える力を備えていることが求められています。

このことは、受験勉強は無意味な努力なのではなく、それを通して社会で役立つ「知の力」を鍛えるものになってきている、と言い換えることもできます。たとえば、東京大学の英語の入試問題に例をとってみます。

大問1 (A) は短めの英文を読み、その内容を要約する問題です。相手の主張を誤解も曲解もせず正しく理解し、それを第三者に正確に伝える、というのはあらゆる学問の土台になる技能です。正しく受け取ることも正しく表現することもかなり難しく、相当な練習が必要です。しかし、知的活動を伴う職業につくのであれば、この力は必須の技能です。

大問1 (B) は長めの英文のパラグラフ（段落）整序を中心とした設問です。全体の主旨と論理展開の流れを踏まえてばらばらになったパラグラフを並べ替えるには、高度な論理構成力が必要です。それに合わせて速読力も不可欠です。ここには数分しかかけられず、和訳しながら読んでいたのでは解ききれないからです。大学側は、英語を英語のまま高速かつ論理的に読む力を受験生に求めているのでしょう。

この大問1 (A) (B) で全体の5分の1程度なのですが、ここまで概観しただけでも、単に知識の暗記が求められているわけではないことはお分かりいただけたと思います。受験勉強というのは、大学進学後にさらに学力を高めていく土台を整備するものだと考えるのが妥当です。大学合格は最終目標なのではなく過程です。さらに高みを目指せる基礎学力を身につけ、自分なりの勉強法を確立していくことが受験勉強なのです。詰め込み式の勉強をして、合格後に伸びきったゴムのようになっている場合はありません。受験にしか役立たない間違った勉強法をすべきでもありません。

また、国語力が全ての科目の鍵になるという点も指摘しておきたいと思います。私たちは多くのことを言葉で把握し言葉を使って考えています。母語の守備範囲が狭いと多岐に渡るものごとを把握できず、その論理力が弱いと複雑なものごとを考えることができません。

丸暗記ではなく本質を学ぶ

丸暗記ではなく、本質を学ぶということは本当に大事なことです。数学の公式に関しては、このことはよく言われることですが、英単語に関しては未だに市販の単語帳の暗記がほとんどの教育機関で推奨されています。しかし、英語と日本語の対応で語義を身につけていく勉強をグノーブルではお勧めしていません。単語の根幹の意味を把握して、あとはさまざまな文脈に出てくる度に、その語のイメージを自分の中でより豊かで的確なものに育てていけば、その言葉は本当に自分のものになり、使いこなすことができるものになっていきます。

ひとつ例を挙げてみます。先日、高3生の授業で、絶滅してしまっていたオオカミをイエローストーン国立公園周辺に再導入した話を扱いました。順調にオオカミの数が増えただけではなく、生態系のトップに立つオオカミを再導入したことで、生態系全体が豊かなものになったというサクセスストーリーです。その教材の中にこんな一文があります。

To regulate the ecosystem and maintain biodiversity, ...Yellowstone needs its top dog...

「生態系を健全にして、生物多様性を維持するためには、… イエローストーンにはその生態系の頂点に立つ捕食動物 (top dog = top predator) が必要である…。」

下線を引いたregulateは「～を健全にして」としましたが、市販されているある単語帳にはregulateの意味として「～を規制する」のひとつしか書かれていません。「規制する」というのは「何らかの規則や決まり事で制限

する」ことですから、「食品添加物の使用を規制する」、「ウェブサイトの閲覧を規制する」とは言えますが、「生態系を規制する」とは言えません。

「～を規制する」以外に、「～を調節する」という意味を紹介している単語帳もあります。「生態系を調節する」であれば、意味は通ると思いますが、それでも、regulateという言葉の本来のイメージは今ひとつピンと来ません。

語源的にはregulateという言葉は、royal「王の、王室の」、realm「王国」などの関連語です。regの部分は「王のものさし」という語根として使われますから、「王の基準に合わせる」という考え方から、regularは「規則正しい、正選手」という意味になります。regulateは動詞ですから、たとえば“Guns are regulated in Japan.”という文は「基準に合わせて規制する」→「銃は日本では規制されている」、「Our sweat regulated our heat.”は「基準に合わせて調節する」→「私たちの汗は体温を調節する」と解釈できます。

この「本来のものさしに合わせる」というイメージを持っていれば、“regulate the ecosystem”は「生態系を健全にする、正常にする、整える、改善する」などと理解することができます。

ところが、単語帳を暗記するのが英語の勉強だと思ってしまうと、「生態系を規制する」として解釈できたのだと考えてしまいます。これでは英文の意味は何となくしか分かりません。

大切なことは、まずは言葉の根幹の意味を把握することです。そして、実際の英文を繰り返し音読・黙読することを通して、その言葉の文脈の中での使い方を自分にとってしっくりくるものにしていけることです。

実は、英和辞典を調べてみても、regulateの訳語としては「～を健全にする、正常にする、整える、改善する」などは載っていません。でも、辞書に訳語が載っているかどうかは気にしなくてもいい場合は多々あります。文脈からその場でのその言葉の用法を把握し、自分でもその言葉を適切に使える力を鍛えていくことが大切なことなのです。英語と日本語の対応を覚えるだけでは、その言葉を正しく使う力は身につけません。

なお、手元にあるロングマンではregulateをto control an activity or process, especially by rules...と、明快に定義しています。英語力が一定のレベルになったら、語感を正しく養うために英英辞典をメインにするのがお勧めだと付記しておきます。

大学入学後に活躍する

受験勉強で扱う題材を、閉じられた狭いものに限定しないこと、世界に対して開かれたものとして扱うことも大切だと思います。私たち教える側が、「これだけやって

おけば効率よく合格できる」という態度に終始していると、regulateの訳語として「～を規制する」だけを覚え、「生態系を規制する」と訳して背景の解釈には何の興味も持たない生徒を生み出してしまいます。

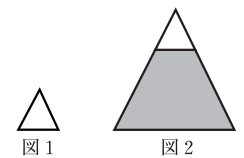
単語の意味や文法力を試すための英文だから書かれている内容に興味を持つ必要はないと、もし私たちが考えているとすれば、生徒たちの知的好奇心を触発するどころかどんどん萎えさせ、勉強は楽しいものなのではなく退屈なものだという感想を持たせることになりはしないでしょうか。

このような勉強は、まさに受験に合格するためだけのものではないでしょうか。そして大人たちが、「東大に受かりさえすればよい」と考えていけば、東大合格が過程ではなく目的になってしまいます。目的達成後には意欲が減じ、生徒たちは「東大からの人」ではなく、「東大までの人」になってしまいます。高校を卒業してプロ野球のチームに入団した選手が、「あこがれのチームに入ったから目標達成だ。あとはのんびりしよう」と考えるのでしょうか。ますます意欲的に野球に励もうと考えるのが普通のことなのです。

情報は限定した方が効率よく覚えられるという考えは誤解だとの指摘もしておきたいと思います。関連性があれば、そして、興味を引くものであれば、ある程度多い情報の方が知識として定着しやすく、活用できるものになります。

国際社会で役立つ教養

世の中には幾多の文章があり、そこには実にさまざまなことが書かれています。独自の経験や思考、複雑な感情、新しい発見、感動的な創作、世界の出来事、歴史的な事実やその考察などなど。それを読みこなすのは大変です。というのも大人向けに書かれる文章というのは、読者に素養が備わっていることが前提となっているからです。



上の図を見てください。白は言語化されている部分で、グレーは読者が当然持っている期待されている素養部分です。図1は、いわば小学生の低学年に向けて書かれた文章のイメージです。すべてが言い尽くされていますから分かりやすいのですが低い山です。つまり易しいことしか書かれてはいません。図2は大人に向けて書かれた文章です。書かれているのは白の部分だけでグレーは言語化されませんから、素養のない人には理解できません。

グノーブルでは、学年が上がるにつれて、大人向けに書かれた本物の英文を教材として多く扱うようにしています。もちろん、そこに出てくる単語や構文の説明もありますが、文章の背景もしっかり解説していきます。つまり図2のグレーの部分を大切にします。背景の話をしていると、生徒たちはそれを私たちの余談だと受け取っているようですが、皆の顔がこちらを向き、目はたいいてい場合生き生きとしています。いわゆる「お勉強」ではないのでリラックスしているという面もあるのですが、英文の理解が深まり、その奥にあるものが見えてくることを喜ばない生徒はほとんどいません。

リベラル・アーツ（liberal arts）は「一般教養科目」とも訳されますが、その原義は「人を自由にする学問」です。教養を身につけるからこそ、理解の自由度が増して思考の自由度が増します。そして、グローバル化の加速する現代においては、事実上の世界共通言語である英語で教養を身につけることは生徒の将来には必ず役立つはずです。

英語での会話経験がある方ならどなたにもお分かりいただけると思いますが、こちらが多少の文法的な間違いをしても、また、多少流暢さに欠けていても、相手は結構辛抱強くつきあってくれます。（文法ミスもなく流暢な方がいいに決まっていますが。）しかし、相手の話を正しく理解できる能力や論理的に自分の考えを表現できる力の欠如は致命的です。話に深みがなければ国際社会では知識人としては扱ってもらえません。「日本語でなら言える」というのでは不十分なのです。生徒たちが英語で教養を身につけられるよう心掛けることは大人たちの責務だと思います。

「知の道具」を揃える

「知の力」を鍛えていくことは、「知の道具」を揃えていくこととも言えます。道具があると、見えないものが見えてきます。できなかったことができるようになります。たとえばせせらぎの水をビーカーに汲み、それをいくらじっと見つめても裸眼であれば透明にしか見えないかもありません。でも、顕微鏡を使えばさまざまな微生物が見えてくるでしょう。ガリレオは望遠鏡を手にして始めて金星の満ち欠けを発見し、惑星が自ら光を放っていないこと、そして、太陽の周りを回っていることの確証を得ました。

ものごとを洞察し、分析し、味わい、まとめ、伝えるなど、さまざまな頭の働かせ方をしていくには「知の道具」が必要です。しかし、知識をただ増やしても、あるいは、行き当たりばったりに問題演習を続けていても、それだけでは道具は揃いませんし、道具を使う技術も身につきません。「知の道具」整備には、体系だった学習を積み重ねていく必要があるのです。



ハーバードビジネススクールのある文献（“Making the Most of the Best” James Brian Quinn, Philip Anderson, and Sydney Finkelstein）に、大変参考になる話がありましたからそれを簡単に紹介してみます。

現代ではますます“Professional Intellect”「プロの知」を身につけていくことが大切だと、そこでは再三繰り返されています。professionalは、laborerやworkerとは異なります。laborerは「労働者」で肉体的な力が必要とされている人たち、workerも「労働者」と訳されますが、たとえば9時から5時までと決められた時間に働く人で普通は特殊技能を持たない人のことです。professionalは「専門家」です。特別な知識や技能を持っているのでその存在そのものに意味があって、なかなか交換がききません。

professionalが持つ知の習得はまず、①Cognitive Knowledge「頭に入っている知識」を身につけるところから出発します。データや情報はアクセスの仕方が分かっているれば必ずしも頭に入れている必要はないかもしれません。しかし、教育を受け、書物を読むことなどから頭にいったknowledgeは、頭に入っているからこそ成長して大きな力を持つものに変わっていきます。

「頭に入っている知識」の発展型が②Advanced Skills「レベルが上がった使える技能」です。問題を解決し、ものを作り出し、しっかりと効果を発揮出来る技能で、現場で経験を重ねることでこれは習得できます。

さらに経験を積み、考察を深めて行くと③Systems Understanding「体系的理解」が身につきます。さまざ

まな知識の成り立ちを理解し、それぞれの知識が互いにどのように関連しているかを心得ているということです。このレベルまで至ると、複雑で困難な問題を解決することが可能になります。知識が体系立っていますから、次に起こることを的確に予想できるようにもなります。

これらの話は実業界の話なのですが、①から②へ、さらに③へとレベルを上げて行くことで大きな力に発展するというのはまさに中学、高校で身につける数学の話のようです。

①は知識が頭に入っている状態ですから、授業で公式を習った段階です。この段階では教科書の練習問題が解けます。②は、その公式を使った問題をたくさん演習して経験値を高めた段階です。定期考査では高得点が望めます。③の段階になると実力は飛躍的に上がります。各公式がどのように生まれたかも理解して、他の単元で使われる公式とどんなつながりがあるかも体系的に理解できているレベルです。ここまで来れば解法の糸口が見えにくい応用問題、さまざまな知識を組み合わせなければ解きにくい難問にも対処できます。実力テストでの高得点が期待できます。

ここに至れば、数学がどんどん面白くなることは間違いありません。数学者はベッドの中や浴槽につかっているとき、散歩をしているときに素晴らしい着想を得るらしいのですが、それは神さまがインスピレーションを与えてくれるわけではなくて、頭の中に入っている知識同士が突然つながるのだと思います。③のレベルに至っている生徒には数学者のひらめきに類似した体験ができます。脳の中に新しい回路が開通するその体験には、「脳が喜ぶ」という表現がぴったりの感動が伴いますから、それがどんどん学びたいという意欲につながります。

実は、頭の中の思考回路は、「あ！」と自分で気づく体験をしないと自在に使いこなせるものにはなりません。難題に対して時間を十分にかけて考えることの意義はまさにここにあります。解説を読みながら道筋を辿って理解した気になっても、その思考回路は自分のものにはならないのです。

“Professional Intellect”「プロの知」にはまだ先があります。

最終段階は④Self-motivated Creativity「自発的な創造性」です。self-motivatedは「自主的な、主体的な」と言ってもいいでしょう。この姿勢はまさに成功の鍵です。意欲的に創造する姿勢を維持できる企業であれば、たとえ小さな会社であっても、財政面や物的な資産に恵まれた大企業をしのぐこともできます。変化の速い時代にあっても競争力を失うことなく繁栄できる可能性を持ちます。世の中を変える大きなイノベーションを起こすことにもつながるかもしれません。

生徒たちにも同じことが言えます。外から強制されているのではなく本人の内側から意欲が湧いている生徒、

学ぶことが楽しいことだと知っている生徒、勉強することを自分の意志で選んで引き受けている生徒はエネルギーの大きさも質も違います。

もうひとつの目を持つこと

メタ認知（metacognition）という1970年代以降に心理学で使われ始めた言葉があります。メタは「より高次の」という意味ですから、「自分の思考、知覚、言語活動などをより高い次元から認知する」ということです。世阿弥が15世紀に残した「離見の見」という言葉も「自分の舞を、あたかも観客席から眺めるようにもうひとつの目で見るといふこと」ですから、ほぼ同様のことだと言えそうです。

自分を客観的にモニターするような視点が持てれば、まず、ケアレスミスの防止につながります。問題を解きながら「こういう場所でミスをしがちだから気をつけよう」と意識できたり、「しっかり見直そう」と自分に言い聞かせられたりするからです。

高次の視点を手にすれば、「木を見て森を見ず」の状態も回避できそうです。木を観察しながら森の散策をするときに、自分が歩いてきた道筋が意識できれば迷子になる可能性が減ります。「本文中の下線部の意味を説明しなさい」といった設問に対しても、文脈を広く踏まえられますから、何をどうまとめればいいのかの見通しを立てやすくなります。

この視点は、自分自身を見つめるときにも大いに役立つと思います。「今の自分でいいのか」と自分を客観視することが、この先の道を自分で主体的に考えて選んでいく契機になります。

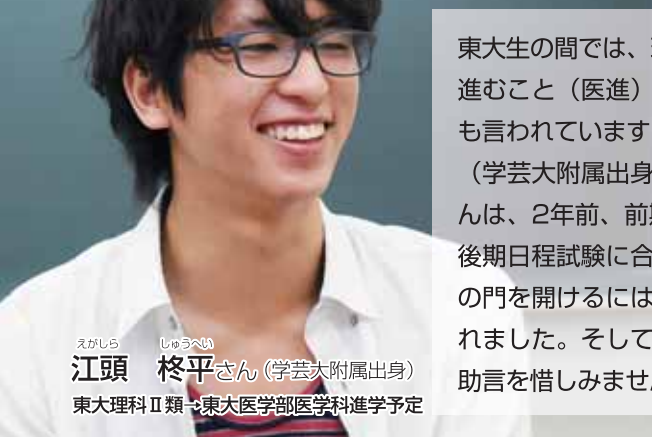
正確な自己評価、自己分析にも通じますから、大学受験に向けての勉強計画を立て、それを着実にこなし、ときに臨機応変に修正しながらゴールに向かう際に有利です。中学受験や高校受験のときは、勉強のコントロールは通っている塾に任せ、生活面は親に任せていればうまくいったかもしれませんが、大学受験においては、本人が管轄する比重が格段に高まります。そのときに、管制塔にいる航空管制官のように全体を見渡せる視点が持てるとさまざまな面で役立ちそうです。問題点の所在を発見する、対策の立て方を考える、複数の科目間での調整を図るなどなのです。

しかし、始めから上手に勉強できる生徒はあまりいません。また、妥当な教材の準備、大学受験という長距離走のペース配分など、すべてを生徒自身がやっていくのは困難です。

そこにコーチ役、つまり塾の必要性があります。スポーツ界に目を向けてみると、コーチの力量でアスリートのパフォーマンスに大きな差が生まれているのが分かります。大学受験にもそれはあてはまると思います。グノーブルではどのようなコーチングを目指しているか、それは次回に紹介させていただきます。



“神業”とも言われる、東大理Ⅱから医学部医学科への進学。 グノ5期生・江頭柊平さんが、その経験を語ってくれました。



えがしら しゅうへい
江頭 柊平さん（学芸大附属出身）
東大理科Ⅱ類→東大医学部医学科進学予定

東大生の間では、理科Ⅱ類で入学して進学振り分けで3年から医学部医学科に進むこと（医進）は、一般入試で理科Ⅲ類に入ることより難しい“神業”とも言われています。今年、それを成し遂げたグノーブル5期生の江頭柊平さん（学芸大附属出身）が、その報告にグノーブルを訪れてくれました。江頭さんは、2年前、前期日程試験での理科Ⅲ類合格が叶わず、わずか100人枠の後期日程試験に合格して理科Ⅱ類に進学していました。そこから東大医学部の門を開けるには、ある先輩のアドバイスが役立ったと江頭さんは話してくれました。そして、「もし同じ境遇のグノーブルの後輩がいる場合には僕も助言を惜しみません」との言葉も残してくれました。

（取材：吉村 高廣）

自分一人じゃ対策が立てられない。 それが後期試験の難しさです。

正式に医学部医学科に進学することが決まりホッとしています。

もともと医学部志望でしたが前期試験で理Ⅲに落ちてしまい、後期で理Ⅱに入りました。後期で東大に入ることについて、世間一般には「倍率が高い」とか「たった100名の狭き門」とか言われています。でも僕は、「前期の時点で本当の強敵たちは受かってしまっているの、後期合格というのは大げさに言うほど狭き門ではない」と考えるようにして後期試験に臨みました。

ただ、前期で失敗した人は、どう気持ちを立て直すかが勝負の分かれ目になります。事実僕も、前期が終わり自己採点してみて「失敗したな」と思った時は本当に落ち込みました。一瞬「もういいや！」と投げやりになったこともありましたが、友だちや中山先生を初めとしたグノの先生方がすごく勇気づけてくださって、最後の力を振り絞って勉強に向かうことができました。

東大の後期試験は自分では適切な対策が立てにくいところがあるので、ほとんどの人は効果的な準備をしないまま試験に臨んでいるのではないのでしょうか。それに加えて、かなりの人が前期で落ちたことにショックを受けて戦意喪失といった状態になっているかもしれません。短期間の間にもう一度モチベーションを上げて「オレは入るぞ！」と思い直し、自分に使えるすべてを使って試験に備えられれば合格の可能性はかな

り上がるのではないのでしょうか。

そこで大事なのがいいアドバイザーの存在です。その点僕は恵まれていました。中山先生に直前まで、「お忙しいのに迷惑だろうな」と思いながらも次々と過去問などの答案を送り続けて、みっちり添削していただいたので（笑）。本当にぎりぎりまでお世話になり先生にはとても感謝しています。

ただ、後期の発表で自分の番号があった時、びっくりするくらい「嬉しい」という気持ちが湧いてこなくて、「やっぱり医学部を諦められないんだな」と改めて実感しました。そこで、20歳までは医学部を目指して頑張ろうと決心したんです。20歳までにダメだったらスッパリ諦めて別の道を探そうと。となると選択肢は2つに絞られます。すでに理Ⅱに入学することは決まっているので、翌年もう一度理Ⅲを受け直すか、それとも進学振り分けを視野に入れて2年生まで勉強を続けながら医学部進学を目指すかです。

でもその時は、理Ⅲに落ちたことのショックを引きずって後ろ向きになっていたの、で、「どちらにしても、毎日勉強ばかりでつまらない生活を送るんだろうな」と憂鬱な気持ちでした。ところが実際に東大に入学してみたら、クラスもいい雰囲気だし普通に大学生活も楽しかったし。さらに1学期の成績が平均88点と思いのほか良くて、「これ、いけるかも」と、ちょっとした手応えも感じました。

結果的には再受験することなく楽しく大学生活を送りながら、当初の目標だった医学部に進むことができてとても嬉しく思っています。

理Ⅱから医学部に進む秘訣は、 選択科目を間違えないことです。

実際は、「理Ⅱの自分は、仮の姿だと自分に言い聞かせて、進学振り分けに向けて猛烈に勉強した」というわけではないんです。「ホントに？」と思う人もいるでしょうが、これはホントです。もちろん最初の志は「受験勉強のように頑張ろう！」と思っていましたが、進振りの基準になるのは定期テストの成績です。定期テストは大学受験と違って、ちゃんと出題内容も決まっているし、しっかり教科書をマスターしていれば点は取れます。だから「そこまで自分を追い込まなくてもいいだろう」という気持ちになれました。テストの1か月くらい前からきちんと準備すればなんとかなるはず、と。そこで肝心なのは、いかに点数の取りやすい科目を選択するか、ということかもしれません。

僕はそれを、ある先輩の助言で知りました。88点で1学期が終わって「まあまあいいじゃん」みたいに思っていた時、1つ上に進学振り分けで医学部に進んだ知り合いがいることをSNSで知り、連絡を取ってみたんです。具体的にどんな勉強をしていたのかとか、どう考えて過ごしていたかを尋ねてみて、「あ、これならできるかも」と思えたのがすごく大きかったです。自分の知っている人がちゃんと「医進」できたんだという事実と、具体的なやり方が分かったことはすごく大きな励みになりましたね。

その方はテニスサークルのキャプテンをしていて、バイトも精力的にやっていた方なんですが、テスト前に必死になってやればなんとかなると。あとは「選択科目を間違えないことだよ」と。というのも選択科目は先生によって評価にバラつきがあるので、より確実に点数を取れる選択科目を選ぶことがとても大事になってくるんです。そうしたアドバイスを参考にしながら自分なりの勉強法を見つけていって、テスト1か月前は勉強に集中しました。

医学部に進むには平均90点以上が必要。理Ⅱからは10人が選ばれます。

東大内では、進学振り分けで医学部に進むことは「神業」みたいに言われているんですが、僕はそれを知らなくて、入ってみて「マジかよ、神業なんてオレにできんのかよ」みたいな気持ちになりました（笑）。最初はち



よっと怯んでしまってた勉強に身が入らない時期もありましたが、その先輩の話を聞いて、気持ちを立て直すことができました。そこで怯みっぱなしだったら、だんだん勉強をしなくなって楽しいキャンパスライフに没頭してしまった可能性もありました。

そもそも進学振り分けというのは何かといえば、東大には半年ごとに学期末テストがあって、1年の1学期と2学期、2年の1学期、合計3学期分の成績で点数の高い人の希望順から進学先が振り分けられる東大独自の仕組みのことです。

科類ごとに進学しやすい学部があって、たとえば、文Ⅰの人なら9割は法学部、理Ⅲの人ならよほどのことがない限りは医学部に進学できます。それとは別に、入学後の興味や関心にあわせて成績のいい人は科類を越えた進学ができます。中には、文科から医学部を目指す人もいて、今年は文科Ⅰ類から医学部に進む人が一人いました。また逆に、理Ⅲから法学部に進学する人もいました。そこが東大の面白いところだと思います。やっぱり東大の教養学部は全方位にわたって様々なことを勉強するので、その中で自分のやりたいことを見つけて当初の考えとは全く違う道に進む人も少なくありません。

医学部に進振りで行こうと思ったら、点数でいえば90点以上が必要です。理Ⅲ以外からでは理Ⅱが一番行きやすく、指定科類枠として10人が医学部に進むことができます。それ以外の文Ⅰから理Ⅰまでの全科類枠から3人。つまり、理Ⅲを除く全2年生からは、13人が医学部に進む権利を得ることになります。

東大の医学部は、やはり多くの人にとって魅力的なものですので、入学当初は理Ⅱの人は「医進したい」という希望を持っている人が多くいます。でも、次第に自分のやりたいことを見つけたり、あるいは途中でリタイヤしたりして、どうしても諦めきれない人だけが残ります。当初はクラスで3、4人「医進」を希望する人がいて、20クラスくらいあるので70人〜80人近くの希望者がいるんじゃないのでしょうか。その中から約1年半の間で、最終的な10人に絞られていくことになるわけです。

英語力を伸ばす武器が、 グノには全て揃っていました。

高2の冬に「医者になりたい」と思って東大の理Ⅲを目指したわけですが、実はそれまでは塾にもほとんど行

っていなくて、参考書や問題集を使って家で一人で勉強していたんです。ただ高2の冬期講習には行ってみようと思っていました。

もともと英語は好きだったし得意科目でもあったのですが、理Ⅲを目指すためには何かが欠けているような気がしていました。英語で万全な自信を持つことができればきっと理Ⅲ受験に踏み切れるだろうと思っていたのが高2の冬で、グノを選んだのは同じ学芸大附属で英語の成績が優秀な友人の勧めでした。

グノーブルの講習を受けたときの衝撃は今でもはっきり覚えています。「あっ、これだ!」と思えました。「この授業をちゃんとやっていけば英語は絶対大丈夫!」と確信して、そこで理Ⅲ受験も決意しました。

率直な言い方をすれば、理Ⅰとか理Ⅱであれば自分でやっても受かるだろうと思っていました。ただ、理Ⅲとなると「今の自分の力じゃ難しいかな」という思いがあったんです。もし僕が、数学や理科の成績が飛び抜けて良かったら話は違ったかも知れませんが、どちらもいま一つ自信がなかったので「何か一つ抜きん出でできる科目がないと戦えないな」と思っていたんです。なら、もともと好きだった英語を武器にしようと考えたわけです。

英語に得意意識があったとは言え、グノに来る前は体系的な勉強はできていませんでした。単語帳を買ってはみても「つまらない作業だ」と思って全然手につかなかったし、リスニングもどうやって勉強していいかわからず、要約や段落整序も行き当たりばったりで解いていました。ところが、グノにはその答えが全部ありました。袖ヶ浦の家まで帰るのに2時間近くかかるとは分かっていたましたが、母親に「どうしてもグノに通いたい」と頼み込みました。

具体的にグノの授業のどんなところに一番驚いたかといえば、それは、英文の読み方でした。グノでは語順のまま前から読んでそのまま意味を取っていき、英文の主旨を的確に捉えていきますが、他ではいちいち構文解析をしていきます。それでは英文の流れが見えてこなくて、全体の主旨もぼやけてしまいます。パラグラフリーディングがいいと言われることもありますが、僕にしてみれば「まずはネイティブみたいな高速で正確な読解力を身につけなければ話が始まらないだろう」と思っていたんです。グノはそこを徹底的に強化してくれました。

それと、単語を覚えていく時も、単語帳を暗記するのではなく、語源や他の語との関連を重視するやり方とか、文脈の中で意味を把握していくことの大切さを教わりました。

それはまさに目からウロコで、日ごろの勉強の中でも1つの単語を辞書で調べた時はその前後の単語も同時に調べて覚えるようにしてみたり、意味が判然としなときは文脈を捉え直したりと、グノで教わったことを徹底して実践していきました。そんなやり方で語彙を増やしていったら、高2が終わった頃には、市販の単語帳を見ても知らない単語はほとんどなくなっていました。それ以来、英語の勉強は完全にグノに任せっきりで数学や理科に力を注ぐことができました。

そしてなんといってもG S Lです。僕は模試の前に、それまでダウンロードした要約とリスニングの教材を全部復習することにしていたんです。そうしたら単語帳を覚えるより数多くの単語を手際よく復習することにもなりまして、英語の耳にもなるし、英文を読むのも速くなるし。本当にG S Lは素晴らしい教材でした。

僕は英語の下積み期間が長かったといえますか（笑）、グノ以前は英文和訳などを一人でコツコツやっていました。

もちろんそうした地味な努力は力になっていましたが、一人じゃできないこと、気づけないことがどうしてもあります。そんな部分がグノで補えました。毎回の添削を通してだったり、先生の授業中の的確な解説だったり、それから、僕はよく質問にも行っていたのでそのときの先生のアドバイスを通して確実に総合力がつきました。毎回用意される教材の質も量も考え抜かれていたものでした。グノに通っていて

「成績が伸びない」という人は、きっと復習していないんだと思います。いかにグノとはいえ、ただ行けばいいというものではありません。グノには英語力を伸ばすための武器が全部揃っています。グノのやり方を信じ切って、復習を大切にして、用意されたツールを徹底的に活用すれば、英語の実力がつかないわけがありません。

G S Lを使った学習法は僕の財産。これからも活用していきます。

僕は大学に入ってからでもG S Lを活用していました。1年生の頃は再受験することを完全に捨てていたわけではなかったので、グノのテキストも残していましたし、しっかりG S Lも聞いて英語の力を落とさないように心がけていたんです。グノに通っていた頃は、本当に何回も聞き込んで、音読もシャドウイングも繰り返しやっていたのでグノで学んだことが体の中に染み付いていて、大学で英語の試験前でも英語の勘を取り戻すために非常

に役立ちましたし今後も活用していくと思います。

G S Lを使った英語の学習法というのは僕にとっての財産です。仮に他のことで忙しくて少し英語から離れる時間があっても、素早く英語に馴染んでいける自信もあります。大学に入ると英語の授業は多くないので、自分から積極的にやらないと英語に触れる機会が減ってしまいますが、G S Lを応用して、自分で英語センスを鈍らせないようにする努力ができると思います。

これからもさらに英語力は継続的に磨いていく必要があると思っていますが、「グノで学んだ方法論でいける」という、こうした自信が持てることは大きいです。G S L、つまり音声を軸にして「英語脳」にする術を身につけたことはグノに通って得た最大のメリットだったかもしれません。

医学部に進めば、英語の論文を膨大に読むことになるでしょうが、英文を読むスピード、それからグノの授業で叩

き込まれた主旨を確実に把握しながら読む力は、大学に入ってからでも大いに役立つと実感しました。それをさらに磨いていけば自分の強みになるんじゃないかと思っています。

教養学部では英語で論文を書く授業がありましたが、グノで本原先生から英文の書き方を教えていただいていたので困ることはありませんでした。東大生の中にも英語の論理展開に沿った書き方を知らない人はたくさんいましたから、結果にも差が出たのだと思います。教養学部のこの授業は、実験を踏まえて論文を書いてプレゼンする、という将来を想定しての授業なのですが、まさにグノで学んできた「使える英語」を活かせたと思いました。これはあくまでも授業の一環ですが、ゆくゆくは学会で発表することもあるでしょうし、医学部に進むにあたって英語は必須のスキルです。これからは、仕事や自分の人生を豊かにする武器として英語力をさらに伸ばしていくつもりです。後輩の皆さんも、グノを信じて頑張ってください。

そもそも『進学振り分け』って、どんなもの？

1. 進学振り分け制度の仕組み

他の大学では入試時に学部学科が決まっているところが大半だが、東大の受験パターンは教養学部の文科Ⅰ類、文科Ⅱ類、文科Ⅲ類、理科Ⅰ類、理科Ⅱ類、理科Ⅲ類の6通り。東大生となると、合格した約3000人全員が駒場キャンパスにて教養学部生として、幅広い科目を各科類入り交じって受けることになる。

各学部・学科に進学するのは3年次からで、基本的には各科類からどの学部へも進学することが可能で、米国の制度 (late specialization) のように**大学入学後に自分の専門分野を決める**ことができる。

その学部学科を決定する制度が『進学振り分け制度』(以下進振り) である。各学部には進学可能な人数制限があり、希望者人数がそれを超えた場合には大学での期末試験の平均点が高い方から制限人数分だけとるというシステムだ。

このために**東大の成績評価**は優・良・可・不可だけでなく0～100点の数値でも付けられる。もちろんそれぞれの科類から進みやすい学部というのほぼ決まっていて、例えば文Ⅰは法学部、理Ⅲならば医学部と、よほどのことがなければ進学可能。逆に文Ⅰ以外から法学部へ、理Ⅲ以外から医学部へと、正規ルート以外で人気学部に進学するには熾烈な競争が行われるのである。特に理Ⅲ以外から医学部への進学は、東大内で**“神業”**と言われるほどの難関となる。

2. 医進の条件

進振り競争の中でも、理Ⅲ以外からの医学部進学(以下医進)が最難関とされており、「医進するよりも理Ⅲに合格する方が簡単だ」といわれているくらいである。

その理由とはとにかく枠が少なく、ほぼ成績トップ13人しか進めないため、2年前期までの学期末試験で**平均点91点以上**をとらねばならない。また、優3割規定(進振り競争の公平性のために優:80～100点を試験受験者の3割にしか出さない制度。そのため90点以上はおおよそ受験者の1割弱となる)もあるため、優秀な東大生の中で、**ほぼ全ての試験で成績トップ1割**に入らねばならないという超難関だ。また科目は(理系なら)数学、物理学、化学、生命科学、実験、情報といった理系科目と、第二外国語、英語論文といった語学からなる必修科目、歴史、文化、社会や自然科学といった選択科目まで多岐にわたっているため、オールマイティに学ぶことが必要となってくる。

医進をするためには授業にコツコツ出る真面目さはもちろん、**効率的に点数を獲得できる科目選択の情報収集力**、そして何より、大学に入ってから一年半、**しっかり勉強を続ける思いの強さと根気強さ**が必要となる。

東大の
成績評価のしかた

医進レベル
91点以上
優
100～80点

良
79～65点

可
64～50点

不可
49～0点

Harvard University

かざはや ともなる
風早 智孔さん（ハーバード大学1年／筑駒出身）

さらなる高みを目指して、世界に羽ばたく人がいます。グノ6期生の風早智孔さんは高校時代の留学体験を通してアメリカの大学を志望し見事ハーバード大学に進学。世界最高峰の教育機関からグノーブルへ、レポートの第一弾が届きました。

世界一といわれる大学に身を置いて、大学4年間を自分らしく過ごしたい。

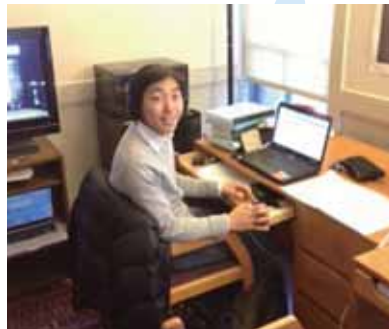
僕は高一の夏から1年間アメリカのミシガン州にある公立高校に留学しました。その時アメリカの持つ多様性やそれに伴う他者への開かれた態度を体感し、それがとても気に入りました。帰国後進路を考える際、そのような場所で再び学ぶことに憧れ、アメリカの大学を志望しました。

学問を続けていく上で英語の環境にいち早く身を置けることや、世界一ともいわれる大学で勉強してみたいと思ったことも強い志望動機になりました。ただ、アメリカの大学受験はあまりに未知な部分も多かったので、日本の大学受験も並行して取り組むことにしました。何もかも締切ギリギリで受験を終えましたが、幸い合格することができ安堵しました。

去年4月に東京大学理科I類にいったん進学しました。理系の授業は文系よりも制約が多いと感じましたが、ゼミ形式の授業をとったりクラスメイトと話したりする中で東大の優秀さを実感しました。

一方、4月中旬に、ハーバード大学では合格者を対象としたオープンキャンパスツアーがありました。3日間ほどの滞在でしたが、多様な出自で、なおかつ各自持つ才能も様々な学生の魅力は東大にはないもので、僕は改めてそれが気に入りました。

また、中高時代から通学が面倒だった僕には、学内での寮生活は魅力的でした。大学4年間を自然豊かなキャンパスで多様性の中に身を置き自分らしく過ごしていきたいと思い、今年9月からハーバード大学に進学しました。



寮の部屋にて



HROのコンサートポスター



フットボールのHarvard-Yale Game

多様な背景と才能を持つルームメイトたち。学業や生活が一体となったダイナミックな環境。

1年生1700人程が住む寮はドームと呼ばれ、学校の中心であるハーバード・ヤードを囲むように17棟建っています。僕の住んでいるウェルド・ホールは、各階全ての部屋が建物を貫く一本の廊下に面していて、寮生同士自然と顔を合わせる機会が多く、寮全体が仲良しです。

寮・部屋の割当は入学時のアンケートをもとに大学が決定します。僕はアメリカ人4人（内一人はリベリア出身）、カナダ人一人、日本人一人の6人部屋です。宗教的にもキリスト教・ユダヤ教・イスラム教とバラけており、多様な背景を持ったルームメイトたちと話すのは刺激的で興味深いです。

出自以上に多様なのが学生たちの才能です。僕のルームメイトの一人はローイングの選手で、高校時代には世界中をツアーしてボートを漕いでいたそうです。各種科学オリンピック代表または代表候補といった、学業に秀でている人たちにもたくさん会いました。僕はハーバード・ラドクリフ・オーケストラ（HRO）にバイオリン奏者として所属しているのですが、そのメンバーの一人は近くにあるNECという音大の授業を絡めた5年間のカリキュラムに入って音楽を本格的に学んでいます。

ハーバードのもう一つの魅力は、学業・生活・趣味が一体となったダイナミックな環境です。HROの練習と公演はマイケル・サンデル教授の授業の場でもあるサンダース・シアターで行われます。アネンバーグという1年生向けの食堂はサンダースに隣接しています。これらの建物やそれぞれの授業が開かれる教室はほとんど全てヤードから徒歩10分圏内です。学期を通じて、指定図書の読みこなし方など学業のみならず、自己管理法や人間関係など生活全般に関する催し物が開かれていて、学内に住むことを前提としたサポートが充実しています。

ハーバードのもう一つの魅力は、学業・生活・趣味が一体となったダイナミックな環境です。HROの練習と公演はマイケル・サンデル教授の授業の場でもあるサンダース・シアターで行われます。アネンバーグという1年生向けの食堂はサンダースに隣接しています。これらの建物やそれぞれの授業が開かれる教室はほとんど全てヤードから徒歩10分圏内です。学期を通じて、指定図書の読みこなし方など学業のみならず、自己管理法や人間関係など生活全般に関する催し物が開かれていて、学内に住むことを前提としたサポートが充実しています。

ハーバードのもう一つの魅力は、学業・生活・趣味が一体となったダイナミックな環境です。HROの練習と公演はマイケル・サンデル教授の授業の場でもあるサンダース・シアターで行われます。アネンバーグという1年生向けの食堂はサンダースに隣接しています。これらの建物やそれぞれの授業が開かれる教室はほとんど全てヤードから徒歩10分圏内です。学期を通じて、指定図書の読みこなし方など学業のみならず、自己管理法や人間関係など生活全般に関する催し物が開かれていて、学内に住むことを前提としたサポートが充実しています。

University of Pennsylvania

いしくら あいり
石倉 愛莉さん（早稲田大学国際教養学部在学／栄東出身）

日本を飛び出し違った環境に身を置きながら学ぶことでしか見えてこないものがあります。グノ5期生の石倉愛莉さんは、いままさにその真っ最中。刺激と発見に満ちたペンシルバニア大学でのキャンパスライフをレポートしていただきました。

白熱するディスカッション。刺激される学生たちの学習意欲。

グノ生の皆さん、こんにちは。グノ5期生の石倉愛莉です。私は2012年9月よりアメリカのペンシルバニア大学に留学しています。

私が在学している早稲田大学国際教養学部では1年間の留学がプログラムの一環であり、国際教養学部の「グローバルに活躍する人材を育成する」という目標を実現させるために行われています。

ペンシルバニア大学はアメリカの東海岸に位置する有名私立大学の集まりである、Ivy Leagueの一つ。アメリカ全土のみならず、世界各国から多くの優秀な学生が集まり、勉学に励んでいます。私がペンシルバニア大学に来て驚いたのが大学の規模、完備された施設、そして学生の学習意欲です。

ペンシルバニア大学のキャンパスは非常に大きく、街の一部が大学のキャンパスとなっていて、その中に多くの研究機関があります。大学病院、研究室、教会、学問分野ごとに分けられた図書館などはその一例です。しかし、一番に際立つ特徴は学生たちの学習意欲です。授業では誰もが積極的に質問をし、教授が講義中に出す質問に積極的に手を挙げて答えています。また、ディスカッションのある授業ではどの学生も自分の意見を述べ、討論はとても白熱しています。

先日、私の取っている心理学の授業では、動物実験に対する賛否のディスカッションがあり、全員が自分の立場とその理由を述べるという授業が行われました。あまりにもディスカッションが白熱して、授業終了後も討論を続けている学生も多数いました。

また授業時間外も勉強に励み、図書館に残って勉強する学生の姿が多く、私にとって大変刺激になります。



フィラデルフィアの象徴LOVEの前にて



現地の友達との夕食会



キャンパスを歩くLocust Walk

国際的な環境格差を実感した、Penn for UNICEFへの参加。

留学をしているからには、学業を頑張るのはもちろん、せっかく異国で約1年間過ごすので、現地の人との交流や文化体験など勉強以外の事にも力を注ぎたいと考えています。その一つとして、私はクラブ活動を生懸命取り組んでいます。

私は現在 Penn for UNICEF という団体に所属しています。名前からわかるように、ユニセフが行っているような活動をペンシルバニア大学の学生が主体となって行っています。日本やアメリカなどの先進国では不自由なく生活していることが当たり前前と思われがちですが、実は今もなおアフリカなどの発展途上国において貧困で生活に困っている人々が多くいることをキャンパス内に広めるといった活動です。

11月18日にPenn for UNICEF の最大のイベントであるHunger Banquetが行われ、私はその運営に携わりました。このイベントは、国々の間に未だ存在する食料格差をペンシルバニア大学の学生に知ってもらうことを目的としたものです。

集まった人々は抽選で上流・中流・下級階級に分けられ、それぞれテーブルと椅子、椅子のみ、床で食事を取るように分けられました。さらに、大学近くのレストランの協力で集めた食料を階級ごとに種類や量を定めて分け、階級の間に存在する格差を体験してもらいました。

さらにこのイベントでは、アフガニスタンで生まれバキスタンで育った女性をゲストスピーカーとして招き、彼女が今まで経験してきた事や育った生活環境など自分の人生についての話をしてもらいました。

私はこのイベントを通して、自分がいかに恵まれた環境の中で育ってきたのかを思い知りました。当たり前のように食事をし、大学に通い、留学できていること、そして健康に生きていることは本当に幸せなことであると気づかされました。これからもPenn for UNICEF では世界各国の現状に対する意識を高める活動を行っていくので、今後の行事が楽しみです。

卒業生編著

グノーブル用語辞典

グノーブルには、独自の学習教材やメソッド、指導方法があります。これらを実際に体験した卒業生たちに、「生の声」を交えて解説していただきます。

【英文法の解説】 えいぶんぽうのかいせつ

一般的には文法事項やイディオムは「仕組みはよくわからないけどとにかく覚える」ことが多い。しかし、そこで基本原理から説明してくれるのがグノーブル。例えば all the better for で「それゆえなおいっそう」と丸暗記している受験生は多いが、実は all が強調の意味、the が「その分だけ」という副詞なのである。これを知っていれば all the better precious のような表現は誤りとわかる（正しくは all the more precious）。文法事項は教える側も説明が面倒で「覚えて！」ですませてしまうことが多い。しかしそれだと、英作文を書いているとき急によくわからなくなったり、文法問題でうまく問題を出されて引っかかったりする。グノーブルでは、そういう事柄を当然のごとく原理から説明してくれる。「説明してもどうせわからない」と突き放すのではないグノの真摯で丁寧なやり方が、生徒たちの英語の知識の真の理解につながっている。



解説者：奥戸 道子（東大理科Ⅰ類 2年 桜蔭出身）

【単語解説】 たんごかいせつ

緑の草はよく育つ—この事実と、green、grass、grow がどれも gr から始まることは決して無関係ではなかった。これがグノーブル流単語解説だ。「単語帳を使って単語を暗記しようとしても、やがて飽きが来て、忘れてしまう。」そんなあなたにとっては、とても新鮮で耳寄りな話ではないだろうか。授業は感動体験の宝庫だ。それ以上は無理と思われる単語も、さらに細かく分割される。構成要素がわかって意味はわからない単語には、もれなく先生のモーション付き解説が。当然1つの単語につき1つの和訳があるのではない。多義語や対義語、類義語に関連する言葉の数々。そして教養を少々。バラバラに覚えた単語同士が繋がり、混沌とした知識が整理しなおされる。活字が生き生きとした意味をもって、向こうから飛び込んでくる。そしてあなたは気づくだろう、暗記と丸暗記は違うことに。単語自体に見覚えはなくても輪郭をつかめることに。Gnoble という言葉の意味がわかる日も遠くないはず。



解説者：圓 詞央里（東大文科Ⅲ類 1年 豊島岡女子出身）

【添削】 てんさく

グノーブルでは宿題はもちろん授業内にやった要約や英作文をその場で添削してくれる。読解の授業では毎回最初に要約を書いて添削してもらうのだが、その点数は生徒の大きな関心事である。点が良ければ気分良くその後の授業を受けられるが、何回も悪い点が続きと嫌になる。さらに、皆がどんどん提出していく中いこうにまとめる文章の趣旨がつかめないと「どうにか出さずに逃れられないかな…」と弱気になる。そんな時、ふと顔を上げると答案を書く生徒本人よりも真剣に答案に向き合って添削している先生がいる。そんな先生の気迫溢れる姿を見ると、こんなに一生懸命添削してくれているのかと知り、やっぱり自分も投げ出さずにやり切らなければならないと思直す。グノーブルでは、生徒一人ひとりに誠実に向き合うように答案一枚一枚真剣に添削してくれる。



解説者：奥戸 道子（東大理科Ⅰ類 2年 桜蔭出身）

【長時間授業】 ちょうじかんじゅぎょう

グノーブルの授業は毎回が驚きの連続だ。扱う英文の量が多いだけでなく、トピックも多彩で興味が途切れることがない。自分の知らない分野の英文は退屈だと思われるかもしれないが、グノーブルの授業は違う。単なる和訳にとどまらず、文章を背景から理解できるような、深い解説が行われるのだ。英語の勉強に来て、歴史、哲学から物理、生物まで幅広い教養が身につくという、まさに一石二鳥の授業である。さらに、文章に出てきた単語は語源から遡って説明されるので、ノートには樹形図状に派生語がどんどん並んでいく。このように盛りだくさんの内容が、驚くべき速さで展開されるので、皆、一言も聞きもらすまいと集中する。惜しみなく解説をして下さる先生方の熱意により、気がつけば3時間経っていたなんてことも多い。だから授業後には、新たな知識を得た充実感、達成感でいっぱいになる。グノーブルの授業には、物理的な時間を超越した不思議な魅力がある。



解説者：上原 ひとみ（東大文科Ⅰ類 1年 桜蔭出身）

INFORMATION

東大秋入学の全面移行を睨み、
2013年より『FLYプログラム』を導入。

入学直後の1年半を休学扱いとし、見聞を広めるモラトリアムな期間に。

東大は2013年から、入学直後の学生が1年間、休学して語学留学やインターンシップ（就業体験）、ボランティア活動に取り組める「初年次長期自主活動プログラム（FLYプログラム）」を導入する。これには秋入学の全面移行を目指すにあたり、それに伴い発生する高校卒業から入学までの半年の空白期間に実施する活動の成果や課題の検証にもつなげたい考えがある。

プログラムの概要は、新入生約3000人の1%の約30人を上限とし、希望者は合格後に申請書を提出し、東大が計画を審査する。入学直後の1年間は休学扱いとし学費の徴収はない。ただしプログラム期間中は単位は取得できず、卒業まで5年かかることとなるが、もちろん図書館などの学内施設は利用できる。学生は担当教員に定期的に連絡し、復学後には活動結果を公表することが義務づけられている。東大はこの活動の支援金として50万円を上限に補助するとしている。

イギリスの「ギャップイヤー」にならい、タフでグローバルな学生の育成を。

東大が導入を決めた「FLYプログラム」は、イギリスなどで実施されている「ギャップイヤー」という制度にならって設計されている。イギリスでは高校卒業（6月）後、大学の授業開始（10月）までに1年をプラスして、1年半程度の猶予期間を設け、ボランティア活動や就業体験、海外留学などの経験を積んでから、大学で本格的な勉強を始めることが習慣となっている。

もともとは、英国貴族の子弟が見聞を広めるために世界旅行などをしたのが始まりと言われており、ウィリアム王子も「ギャップイヤー」の体験者の一人である。

東大の濱田純一総長は、5年後をめどに秋入学全面移行を提言。検討会議は2012年秋、2014年度の新入生から、正規の授業開始は9月で、卒業は3年半後の3月とする新たな学事暦の案を公表した。

FLYプログラムと秋入学や新学事暦などとの関係について、佐藤慎一副学長は「タフでグローバルな学生を育てる」という狙いは同じで、現在の学事暦のまままでできることから始める。新学事暦が導入されても、長期の体験活動ができるプログラムは残したい」としている。

晴雨読 この一冊

『100年の難問はなぜ解けたのか』
天才数学者の光と影

ポアンカレ予想をご存じだろうか。これは、20世紀初頭にフランスの学者アンリ・ポアンカレが提唱した、地球の形や宇宙の形にまで及ぶ大問題。学術的に言うと「単連結な三次元多様体は三次元球面と同相である」ということだが、さっぱり理解できない。それもそのはず、これは100年もの間、多くの数学者たちを苦しめてきた難問中の難問なのだ。この難問を証明したのがロシアの数学者グリゴリ・ペレリマン。これは数学界の大事件となり、数学界最高権威のフィールズ賞が与えられることになる。ところがペレリマンはそれを辞退し、数学界から忽然と姿を消した…。この本には、ペレリマン以外にも、ポアンカレ予想に翻弄された多くの数学者が登場し、数学者でしか感じ得ない孤独の厳しさが語られている。残念ながら最後までポアンカレ予想の実態は理解できなかったが、下手なミステリーより緊迫感のある上質なドキュメントだった。

編集後記

今回の巻頭特集は、グノーブルが掲げる「知の力」とは何かを、皆さまにご理解いただくため、中山先生の理念に対する想いをご紹介します。生徒たちの主体性を育むべく、まなざしを向けて、最後まで信じる。その過程で、国際社会で役立つ教養を身につけ、大人としての「知の道具」をそろえていく。それが、2006年の発足以来、グノーブルの変わらぬ理念であると先生はおっしゃいます。そうした中から、第二特集でご紹介した江頭柊平さん（東大理Ⅱ→医学部進学）や、米国からレポートを寄せてくれた、ハーバード大学進学の風早智孔さん、ペンシルバニア大学に留学中の石倉愛莉さんなどが巣立っていきました。そして間もなく、グノーブルで「知の力」を育んだ7期生の皆さんが、新たな門出を迎えます。それぞれの学びの場所で、大いに活躍してくださることを期待します。そしてその活躍に、私ども編集部がスポットライトを当てられる日が訪れるのを、心より楽しみにしています。

◆今回の表紙は、古代ギリシャの哲学者アリストテレスです。英文の内容は「すべての人間は、生まれつき知を欲する」というものです。
(編集責任：吉村高廣)



春日真人
(NHKディレクター)
新潮文庫 438円

